茨木市内の文字関係資料について

木村 健明

１．はじめに

文化財資料館では、第 18 回企画展として『発掘された文字 - 市域出土の墨書土器・刻書土器・硯 - 』（会期：平成 28 年５月 18 日～７月 18 日）を行った。展示では、茨木市内で出土した古代の墨書・刻書土器や陶硯といった文字関係資料を対象とした。展示資料には、今回が初公開であったものも含まれる。

本来は、調査成果を報告書として刊行することで、資料の公開と活用がなされる。しかし、未だ整理途中のものが多く、それには更なる時間を必要とする。そのため、展示という形で公開した資料が更に活用されるように、本稿において図面を提示する。合わせて市内でこれまでに確認されている文字関係資料の集成を行う。

紹介した遺物は、既刊の報告書に掲載されたものと、茨木市教育委員会で所蔵する資料の内、現時点で把握し得たものである。

遺物図面中で【】内に記した番号は各報告書内での番号、アルファベットは参考文献に付与したアルファベットとそれぞれ対応する（註１）。

２．各遺跡出土遺物

鮎川遺跡（１）

１は須恵器圏足円面硯である。口径 17.0cm、残存高 3.9cm を測り、1/4 程度が残存する。幅 1.2cm 程度の方形透孔の痕跡が４箇所確認できる。残存する両端には透孔が確認できず、全周には透孔を穿っていない。透孔の上に突帯が一条巡る。硯面は陸の外周に低い堤が巡る。海の外縁は陸より高く、端部は丸く収める。陸には火ぶくれが認められ、自然釉がかかるが、使用痕が認められる。（AYK89 年度調査）

総持寺北遺跡（２～４・23～27）

２は須恵器円面硯である。口径 16.4cm、残存高 3.4cm を測り、1/4 程度が残存する。方形と推測される透孔の痕跡が１箇所確認できる。透孔の上に突帯が一条巡る。硯面は陸の外周に堤をもたないが、明確な稜線をもち、海の外縁は陸の周縁より低く、端部は丸く収める。陸には使用痕が認められる。（SJN00 －１調査）

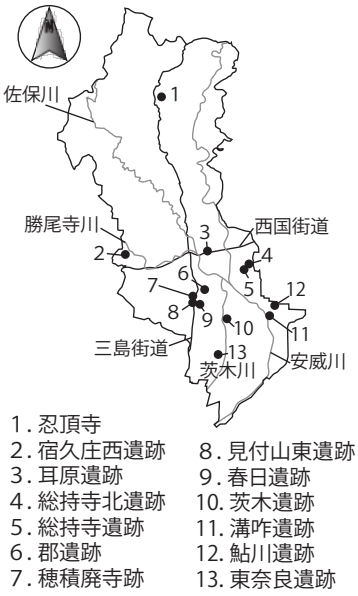
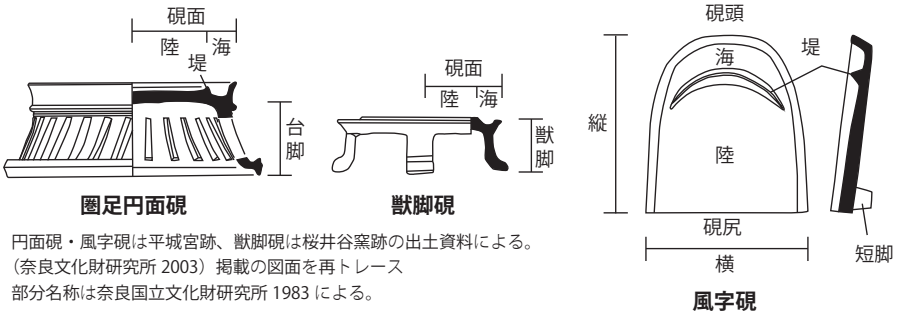


図１　関連遺跡位置図

３は須恵器円面硯である。口径 15.2cm、残存高 2.2cm を測る。方形透孔の痕跡が確認できる。内面・外面ともに回転ナデを施す。硯面は陸の外周に堤をもち、海の外縁は陸より高く、端部は面を成す。４は須恵器風字硯である。残存幅 3.25cm、残存高 4.05cm を測る。短脚部にケズリを施し、本体に貼り付け後、軽いナデを施す。

24 ～ 29 は墨書土器である。

24 は土師器杯Ａ（註２）である。口径 18.6cm、器高 3.2cm を測る。外面底部にひらがなの「の」の様な墨書が認められる。25 は土師器杯Ｂであ



円面硯・風字硯は平城宮跡、獣脚硯は桜井谷窯跡の出土資料による。
（奈良文化財研究所 2003）掲載の図面を再トレース
部分名称は奈良国立文化財研究所 1983 による。

図２　硯部分名称図

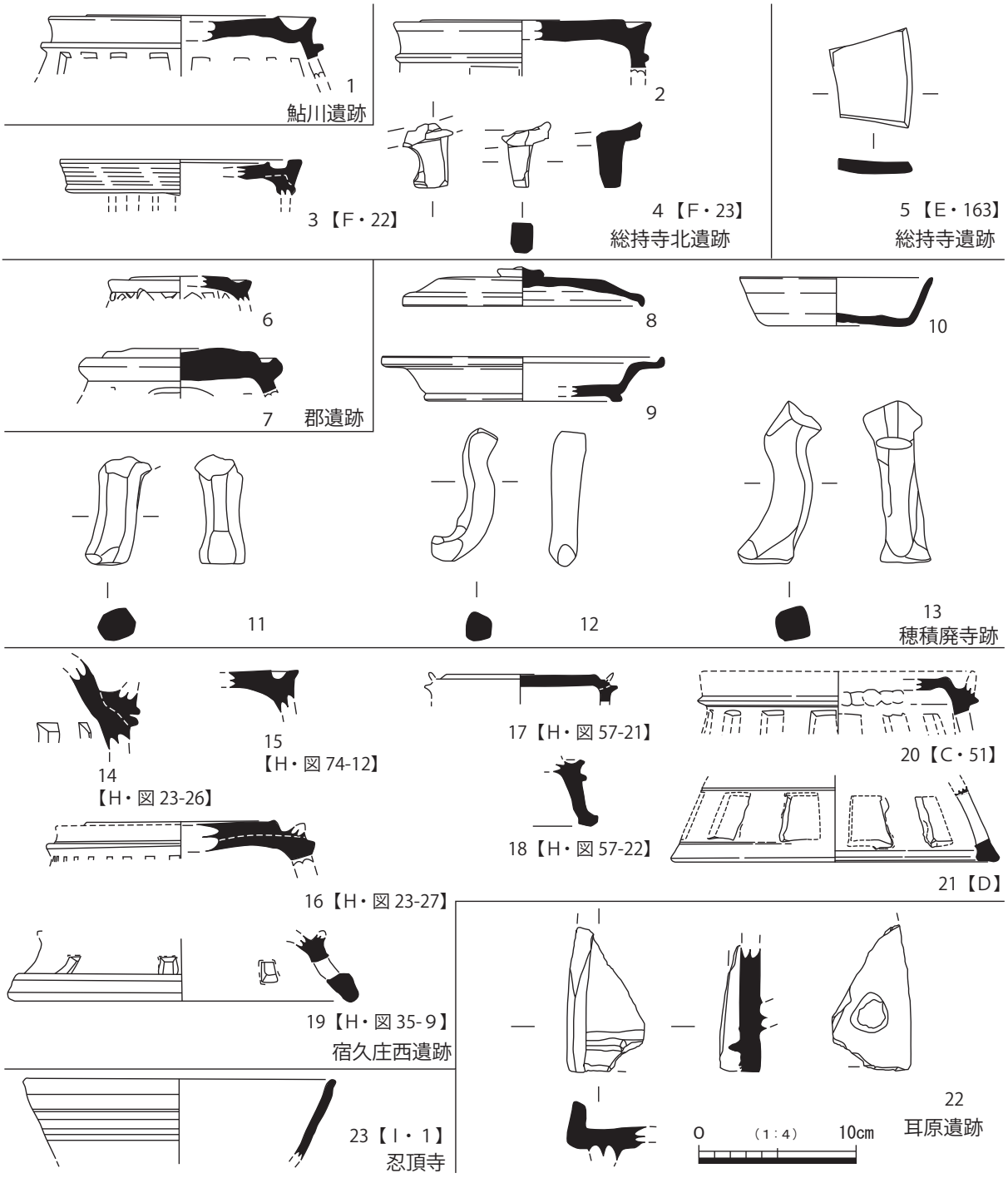


図３　陶硯集成図

る。口径 16.0cm、器高 4.0cm、高台径 8.4cm を測る。底部高台内に記号もしくは異体字と考えられる墨書が認められる。ともに８世紀である。

26 は土師器椀Ｃである。口径 14.0cm、器高 3.8cm を測る。体部外面に指頭圧痕が認められ、内面にハケを施す。底部外面中央に「周防」の墨書が認められる。９世紀中頃～後半である。

27・28 は土師器の小片である。27 は外面に墨痕が認められるが、判読できない。28 は外面に「大」の墨書が認められる。ともに８～９世紀である。29 は須恵器杯の小片である。最大長 5.85cm、最大幅 3.4cm を測り、外面に線状の墨痕が認められる。（大阪府文化財調査研究センター（以下、大文セ）1998）

総持寺遺跡（５・30・31）

５は須恵器甕の体部片である。長さ 6.0cm、幅 5.2cm を測る。転用硯として報告されている。

30 は土師器杯Ｃである。口径 13.2cm、器高 4.4cm を測る。体部外面に指頭圧痕が認められる。底部外面に墨書が認められるが、判読できない。

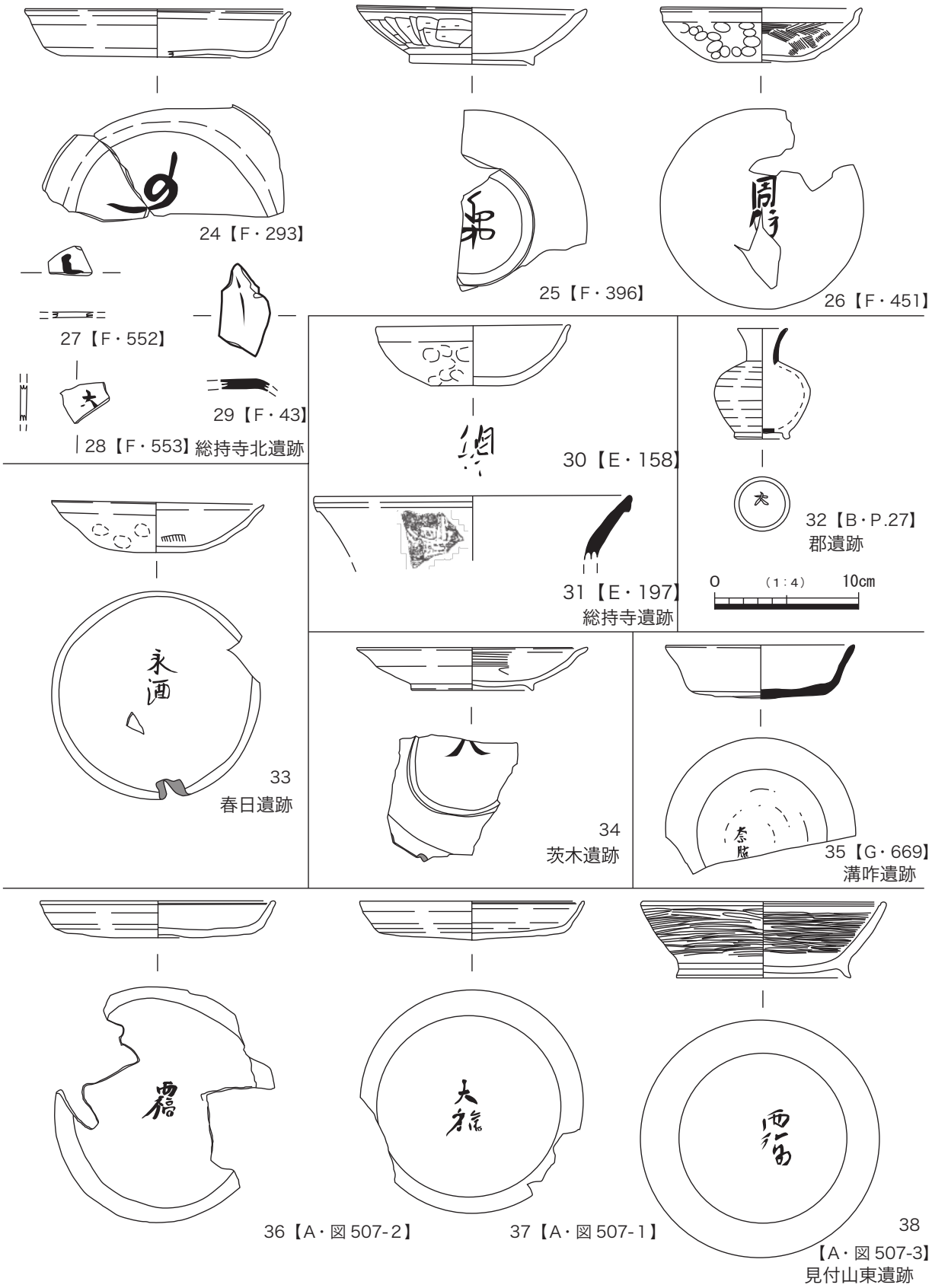


図4　墨書・刻書土器集成図

31は刻書土器である。7世紀末～8世紀初頭の須恵器甕で、頸部外面に「…□調□…」の文字が焼成前にヘラ書きされている。文字は口縁部直下に横向きで書かれている。（大阪府教育委員会（以下、府教委）2007）3文字の存在が確認できるが、判読できるのは「調」だけである。ただし、「調」の後の文字は、「瓮」である可能性が考えられている。（山上2007）

郡遺跡（６・７・32）

６・７はともに須恵器圏足円面硯である。(KOR76－１調査)

６は口径 8.4cm、残存高 1.3cm を測り、1/3 が残存する。脚部の透孔は三角形を上下交互に配置する。貫通しない三角形一個と、貫通する円孔一個も存在する。硯面は陸の外周に稜線・堤ともにもたず、海の外縁は陸より低く、端部は丸く収める。陸には使用痕が認められる。

７は口径 12.0cm、残存高 3.2cm を測り、1/3 が残存する。硯面の厚さが 2.0cm と非常に厚い。透孔は部分的に残存し、弧を描いている。硯面は陸の外周が緩やかな段をもつ。海の外縁は陸より低く、外縁は三角形状に立ち上がる。陸にはわずかに使用痕が認められる。

32 は須恵器壺Ｍである。口径 3.4cm、器高 7.7cm、高台径 3.1cm を測り（註３）、口縁の一部を欠く以外は完形である。口縁部はわずかに外方へひらき、球形の体部をもつ。底部外面中央に「大」の文字が焼成前にヘラ書きされている。８～９世紀初頭である。(KOR77－１調査　市教委　1978 P.27)

穂積廃寺跡（８～13）

HZH82－２調査出土で、８世紀初頭である。

８～10 はいずれも須恵器の転用硯である。８は杯Ｂ蓋である。口径 15.3cm、器高 2.5cm を測り、4/5 が残存する。扁平な宝珠形つまみをもつ。水平に延びる天井部をもち、口縁端部は垂直に下がる。内面全体に墨が付着する。９は杯Ｂである。口径 17.6cm、器高 2.8cm、底径 12.6cm を測り、2/3 が残存する。断面四角形状の貼り付け高台をもち、口縁部は外側に大きく屈曲して水平に延び、端部は上方につまみ上げる。内面全体に墨が付着する。10 は杯Ａである。口径 12.2cm、器高 3.1cm、底径 8.8cm を測り、1/4 が残存する。底面に回転ヘラ切痕が認められる。口縁部内面に墨が付着するが、煤である可能性も残る。

11～13 はいずれも須恵器獣脚硯の獣脚である。12 は焼成不良であるのか明黄褐色を呈する。
11 は残存高 7.0cm を測る。断面形状は六角形を呈する。上端で屈曲しており、本来は 13 と同様の形態であった可能性がある。12 は残存高 8.3cm を測る。断面形状は四角形を呈する。Ｓ字状に屈曲し、脚端部は猫脚状を呈する。13 は残存高 10.4cm を測る。断面形状は四角形を呈する。Ｓ字状に屈曲する。

春日遺跡（33）

33 は土師器椀Ｄである。緩やかに立ち上がる口縁部をもつ。口径 14.7cm、器高 3.5cm を測り、口縁部と底部の一部が欠損する以外はほぼ完形である。外面に指頭圧痕が認められ、内面に板ナデを施す。底部外面中央に「永酒」の墨書が認められる。９～10 世紀である。(KSG13－１調査)

茨木遺跡（34）

34 は土師器杯Ｂである。口径 16.0cm、器高 3.0cm、底径 8.4cm を測り、1/3 が残存する。断面三角形状の高台をもち、体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はヨコナデにより外方へひらく。内面に板ナデを施す。底部外面中央に２画の墨書が認められ、「人・大・天」などの可能性が考えられる。９世紀中頃である。(IBK15－３調査)

溝咋遺跡（35）

35 は須恵器杯Ａである。口径 12.9cm、器高 3.9cm、底径 9.0cm を測る。外面にカキメ、回転ナデ、ケズリ、内面に回転ナデを施す。底部外面に「奈舠」の墨書が認められる。８世紀中頃である。(大文セ　2000)

見付山東遺跡（36～38）

36・37 は土師器皿Ａ、38 は土師器杯Ｂである。いずれも MYE97－１調査出土で、８世紀末～９世紀初頭である。

36 は口径 16.6cm、器高 2.5cm を測る。2/3 が残存する。底部外面中央に「西福」の墨書が認められる。37 は口径 15.4cm、器高 2.7cm を測る。ほぼ完形である。底部外面中央に「大福」の墨書が認められる。口縁端部内面に沈線１条を施す。38 は口径 17.0cm、器高 5.3cm、底径 12.0cm を測る。口縁部は 1/5 残存する。底部外面に「西福」の墨書が認められる。「ハ」字状にひらく高台をもつ。内外面にミガキ、口縁端部内面に沈線１条を施す。(鈴木・濱野 2002、茨木市 2014)

宿久庄西遺跡（14～21）

14～21 はいずれも須恵器圏足円面硯である。14～19 は８世紀、20・21 は７世紀末～８世紀初頭である。

14 は台脚上部のみ残存し、小片のため口径の復元はできない。残存高は 5.5cm を測る。方形の透孔を穿つ。透孔の上に突帯一条が巡り、頂部に

凹線を施す。15は肩部片である。陸の外周は稜線をもち、海の外縁とほぼ同じ高さである。端部は面を成し、外方へつまみ出す。陸には使用痕が認められる。16は口径16.8cm、残存高2.5cmを測り、1/3が残存する。硯面と台脚上部が残存し、台脚に方形透孔を穿つ。硯面は陸の外周に堤をもつ。報告書では海の外縁は陸の外周より低く復元されている。17は口径12.4cm、残存高2.4cmを測り、1/4が残存する。脚部に幅1.3cm以上の透孔を穿つ。硯面は陸の外周に堤をもつ。報告書では海の外縁は細く復元されている。18は台脚部のみ残存し、残存高5.8cmを測る。突帯一条が巡る。海の外縁端部は面を成し、台脚端部は外方へ広がる。19は底径21.0cm、残存高4.1cmを測る。台脚部のみ1/6が残存する。方形の透孔を８方向に穿ったと考えられている。台脚端部は丸く収める。(大文セ2002)

20は硯面部径14.0cm、残存高2.35cmを測り、1/6が残存する。硯面と透孔上部が僅かに残る。透孔は幅1.8cmの方形で、14方向に穿たれていたと考えられている。硯面は陸の外周に堤をもつ。報告書では海の外縁は陸より高く復元されている。(SHW94－２調査　茨木市教育委員会(以下、市教委) 2016)

21は残存高4.8cm、底径20.8cmを測り、脚部1/8が残存する。透孔２箇所が残存する。台脚端部は面を成す。(SHW11－１調査　市教委2017)

耳原遺跡（22）

22は須恵器硯である。外側が緩やかに彎曲するため、風字硯と考えられる。残存長9.0cm、残存幅4.8cmを測る。裏側に脚の痕跡が残る。硯尻に断面三角形状の堤をもつ。硯尻に近く、陸と海の境界ではない可能性がある。端部に破断面が認められるが、側壁には認められないため、硯面のみに段をもつ可能性がある。９～10世紀頃である。(2014年度確認調査)

忍頂寺（23）

23は須恵器杯の小片である。口径19.6cm、残存高5.2cmを測る。内面に墨の付着が認められ、転用硯と考えられる。免山篤氏の採集資料で、忍頂寺東側の道路工事終了後に採集されたものである。(清水2015)

３．まとめ

以上、各遺跡出土資料の紹介を行った。現時点で把握できたものは、硯(転用硯含む)24点、墨書・刻書土器15点に上る（註４）。

文字関係資料は、識字層の存在を示すもので、出土する遺跡は、一般集落ではなく官衙や寺院などとの関連を考えられることが多い。

資料の分布に注目すると、郡遺跡とその周囲に位置する春日遺跡・穂積廃寺跡・見付山東遺跡を合わせて硯８点、墨書・刻書土器５点、総持寺遺跡と総持寺北遺跡を合わせて硯４点、墨書・刻書土器８点、宿久庄西遺跡で硯８点が確認されている。鮎川遺跡、溝咋遺跡、茨木遺跡、耳原遺跡、忍頂寺、東奈良遺跡は各１点である。

郡遺跡は嶋下郡の郡家、穂積廃寺跡は郡家に関連する寺院の存在が考えられている。文字関係資料が多いことは、この推定を補強するものといえよう。春日遺跡・見付山東遺跡についても近接する郡遺跡との関連が考えられる。なお、市内には嶋下郡家の他に山陽道の殖村駅家の存在が考えられているが、未だ所在地の確証は得られていない。

総持寺遺跡と総持寺北遺跡では、飛鳥～平安時代の掘立柱建物が多数検出されている。報告書(大文セ1998）では、総持寺が平安時代初めに藤原氏によって建立されたことをふまえ、「律令体制に基づく国家権力を背景として地域支配を行った在地の豪族層の存在」が考えられている。

宿久庄西遺跡では、奈良時代の建物が多数検出されている。北西に隣接する箕面市庄田遺跡（註５）と一体の遺跡と捉えられ、嶋下郡に所在した４郷（新屋・宿人（久）・安威・穂積）の内、宿人（久）郷に位置すると考えられる。鎌倉時代に編纂された『神宮雑例集　巻１』には「中臣清麻呂が天平十二年（740）に壽久郷に籠居し、春日神社を奉遷した」との記述がある。しかし、この他の文献には記載がなく、年代的な齟齬も認められるため疑問が呈されている。報告書（大文セ2002）では文献の記述が誤りであっても、「中臣氏を初めとする有力な氏族が居住地としていた可能性は十分にある」とされている。

茨木遺跡は現時点では、古代の遺構の確認例は少ない。しかし、南側に隣接する新庄遺跡（府教委　1996）では、古代の遺構が検出されており、瓦の出土から寺院の存在も考えられている。34

の出土地点である大手町は新庄遺跡のすぐ北側に位置しており、新庄遺跡から茨木遺跡の南部にかけて、古代の遺構が広がっている可能性がある。

溝咋遺跡では奈良時代の遺物が、後に溝咋神社上宮が置かれる場所の下層でのみまとまって出土している。遺物の様相から祭祀的な性格が考えられている。墨書土器自体はやや離れた地点での出土だが、一群のものと考えられている。

耳原遺跡は遺跡内を東西に西国街道（古代の山陽道を踏襲していると考えられる街道）が通っており、22 はその北側で出土した。東側隣接地（MNH10-2）では掘立柱建物が確認されており、西国街道沿いに９～ 10 世紀頃の集落が存在する可能性が考えられる。

鮎川遺跡はこれまで調査例が少なく、様相の不明な点が多い。硯の出土から識字層の存在が窺われるが、今後の調査に負う所が多い。

忍頂寺は仁寿元年（851）に三澄によって竜王山に建立されたと伝えられる寺院である。23 は識字層が９世紀に存在したことを示している。

各遺跡と文字関係資料との関わりを簡単に述べたが、今後の発掘調査及び整理作業の進展によって、文字関係資料は増加することが見込まれる。その内容次第で、遺跡の性格を確定する材料とも成り得る。嶋下郡内のみならず、畿内の交通体系や、空間配置を考える上でも重要な遺物であり、遺構と合わせて注視していく必要があるだろう。

註

１）今回提示した図面は、既刊の報告書掲載資料も再度トレースを行ったものである。

２）今回紹介した土器類の形式分類は奈良国立文化財研究所 1983 に、時期は古代の土器研究会 1992 ～ 1994 によった。

３）この資料に関しては、報告書（茨木市教育委員会 1978）では縮尺が明示されておらず、（鈴木・濱野 2002）では２倍の大きさで示されている。今回、実見できたため訂正する。

４）未報告であるが、大阪府立福井高校建設に伴って大阪府教育委員会が行なった西福井遺跡の調査でも墨書土器が出土しており、「卩」「卜」「佛」「衆カ」などが認められるようである。（鈴木・濱野 2002）また、2000 年に府下の奈良・平安時代文字資料が集成された段階では、中条小学校遺跡の高台内に線刻「×」が認められる黒色土器が挙げられている。今回、当該資料は文字でないため含めていない。なお、東奈良遺跡出土資料は 11 頁に掲載されている。

５）庄田遺跡では、墨書土器２点、硯３点（内、転用硯２点）が出土している（大文セ 1999）。

参考文献（文献のアルファベットは挿図の出典元）

Ａ・茨木市史編さん委員会 2014『新修　茨木市史』第７巻　史料編　考古

Ｂ・茨木市教育委員会 1978『茨木市郡遺跡発掘調査概報－上穂積・畑田地区－』

Ｃ・茨木市教育委員会 2016『宿久庄西遺跡１』

Ｄ・茨木市教育委員会 2017『宿久庄西遺跡２』

Ｅ・大阪府教育委員会 2007『総持寺遺跡Ⅱ』

Ｆ・（財）大阪府文化財調査研究センター 1998『総持寺遺跡』

Ｇ・（財）大阪府文化財調査研究センター 2000『溝咋遺跡（その１・その２）』

Ｈ・（財）大阪府文化財調査研究センター 2002『宿久庄西遺跡』

Ｉ・清水邦彦 2015「竜王山信仰と忍頂寺」『龍王山をめぐる信仰と人々－山岳寺院の軌跡－』茨木市立文化財資料館　pp. 17-20

茨木市立文化財資料館 2016『発掘された文字－市域出土の墨書土器・刻書土器・硯－』

大阪府教育委員会 1996『新庄遺跡』

（財）大阪府文化財調査研究センター 1998『庄田遺跡』

大阪府立弥生文化博物館 2000『発掘速報展　大阪 2000』

古代の土器研究会 1992・1993・1994『古代の土器１～３　都城の土器集成』

奈良国立文化財研究所 1983『平城宮発掘調査報告』ＸＩ

奈良文化財研究所 2003『古代の陶硯をめぐる諸問題－地方における文書行政をめぐって－』

奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編

山中敏史 1983『陶硯関係文献目録』埋蔵文化財ニュース 41　奈良国立文化財研究所

鈴木雅美・濱野俊一 2002「摂津国嶋下郡における地方官衙遺跡についての一考察」『大阪文化財研究』第 21 号（財）大阪府文化財調査研究センター　pp. 28-34

山上　弘 2007 「「調」刻字土器とその意味」『総持寺遺跡Ⅱ』 大阪府教育委員会　P. 253 ～ 255